

寺院をつなげる

寺の場

TERA NOVA

ロングインタビュー

第1回

慈眼山瑞岩寺

副住職

長谷川俊道さん



“開け、寺”

外から見た 日本のお寺の姿は

大学を出てから福井の永平寺で3年ほど修行しまして、そのあと、ハワイのお寺で7年半ほど住職をしましたが、日本のいわゆる「葬式坊主」と呼ばれるようなお寺の仕事とはまったく違う文化の中で仕事ができただけは、いま振り返ってもよかったと思っています。

お寺の子どもというのは、地域でお葬式があると、「今日はすき焼きだね」と嫌味を言われたものです。そうでなくても、お坊さんならだれでも一度は、自分の職業が嫌になる経験があると思います。そういう中で育ってきて、大学を出て、本山で修業をするのですが、そこには日本中からいろんなお坊さんが毎年毎年150人くらい上がってくるわけで、いろんなお坊さんに出会うんです。そうすると、お坊さんも悪い仕事じゃないなと思うようになりました。お葬式とか法事ばかりがお坊さんの出番じゃない。お坊さんというのは、生きていくこと自体が仕事なんだ。「住職」って言いますよね。「住んでいく」ことが仕事なんです。これはすごいことだなと思いました。

本山から帰ってきたときに、一度、日本という国を、日本の宗教を外から見てみたいと思ってハワイに行ったんです。アメリカでは仏教はマイナーで、お寺の建物も教会なんです。中は全部イスで、お経は英語と日本語が半分ずつ。なにより、お経が10分くらいで、法話が30分くらいある。日本とは反対です(笑)。信者の人は熱心で、毎週日曜日には必ず集まりますから、毎回の法話を語る力がお坊さんに求められます。生活の面では、お寺の経営は基本的にお布施

で成り立っています。私は家族で向こうにいったのですが、家族が暮らすのに必要なお金が300万円とか400万円だとすると、それを信者さんたちで割って、お布施をする。さらには、リタイアしたあとの住居の世話までしてくれるので、お坊さんの生活に不安がないんです。そうすると、お坊さんがお布施に執着しなくなる。日本の場合は、お葬式と法事がメインの収入源ですから、そこが断たれることは生活に直結する問題ですね。いま、地方のお寺で兼業とか廃業とか、自分の生活を支えることで精いっぱいなところがあるのに比べると、ハワイでの生活は、収入はそんなに多くないかもしれませんが、車も家も信者さんが提供してくれるので、布教に専念できる。お坊さんのやることは、布教とか文化活動しかないんです。その分、周りの目も厳しいですよ。たとえば、タバコを吸っていたらアウト。お酒を飲んでビーチを徘徊していたらアウト。ですが、世間の目が厳しい代わりに、お坊さんをとてても尊敬してくれます。文化の違いだと言ってしまうとそれまでですが、そういう中での仕事は緊張感があって、私にとっては「目からうるこ」でした。

そういう環境で仕事をしていたので、日本に帰ってきてみると、お寺というのは、ほんとうに大変なんです。お葬式もやる、法事もやる、お寺の運営も、掃除も、草むしりも、檀家さんが来れば食事もつくる。全部自分でやらなければいけない。なおかつ、お寺できちんと生計を立てられているお寺は全体の3割と言われています。残りの7割のお寺は運営が厳しいという状況。布教に専念するどころではなくなってしまう。生活の



じげんざん・すいがんじ
(群馬県太田市)

天文12年(1543年)、常陸国河内郡若芝宿(茨城県)の「金龍寺」の末寺として創建。本尊は運慶作と伝わる「十一面観世音菩薩像」。中興開基は、矢田堀城主であった金山西条豫殿伊豫守繁俊公で、繁俊公が写経したと云われる「碧巖録全十巻」が寺宝として保管されている。のちに徳川幕府より御朱印地を賜るなど、その格式と伝統を秘めつつ、周辺地域の住民の心の支えとして5世紀近くの間法灯を絶やすことなく今日に至る。



はせがわ・としみち

駒澤大学仏教学部卒業後、大本山永平寺で3年余の修行に励む。福井から群馬まで托鉢をしながら歩いて帰ってきたことはいまでも檀家の間では語り草。その後、ハワイで7年半、開教師の職に就く。帰国後は、「生老病死 生まれてから墓場まで」をモットーに、人生相談&悩み相談、座禅会、写経会、各種寺子屋講座、ライブ、講演会、イベントなどを通じて布教に務め、開かれたお寺をめざす。社会福祉法人毛里田睦会理事長。毛里田保育園園長。



□□□□□□□□□□□□□□

基盤が安定しないので、しかたないところもありますが、海外とはずいぶん事情が違ってきます。

必要とされるお寺に ならなければ

ハワイには、いま、それぞれの宗派を合わせて100寺ほどお寺があります。以前は200寺、曹洞宗のお寺だけで20寺くらいあったのですが、半分はつぶれてしまいました。減ってしまった原因はすべて経営難です。お葬式とか法事が減ってしまったんです。もともと日本から移住した人たちが信者としてお寺を支えていたのですが、子どもたちが4世、5世、6世となっていくうちに、育ちも考え方も日本人からアメリカ人になっていくわけです。日本語はしゃべれない。日本の文化に興味はあるけれど、お彼岸やお盆の意味がわからない。お彼岸の時期は太陽が夏と冬のちょうど間を通るんですよ、と説明したところで、ハワイでは実感できません。いつも太陽は真上にある、赤道直下に暮らしているんですから、当然です。太



□□□□□□□□□□□□□□

陽が東に傾く、西に傾くと言っても、通じない。行為の意味、言葉の意味から説明しないとだめなんです。それで、だんだん信者さんがいなくなって、お葬式と法事に頼っていたお寺は、経済難でつぶれてしまった。それを見たときに、これは、日本でも同じことが起こるぞと思ったんです。日本でつぶれないと言えるのは、祈祷寺と本山、観光寺だけ。これ以外のお寺はすべて危ないと思っています

いま、うちの檀家さんの数が320くらいなのですが、私が日本に帰ってくる前に、父がお寺を運営していたときの1年間の収入がほしい750万円くらいでした。お寺の収入はお葬式と法事で85%くらいを占めていますから、先ほど言ったように、それに頼っているのは、いつ収入がなくなるかわからない。お葬式がなかったら、収入はゼロですから。実に不安定な状態で、これでは安心してやっていけない。なんとかしなければいけないと思っていました。

どうしたらいいのかと考えた結果が、お寺を継続していくためには、みんなに必要とされるお寺にならなければいけない、ということでした。いま、みんながなぜお寺に行かないかと言えば、行く必要がないからです。でも、お寺の数はコンビニエンスストアよりも多いんですね。コンビニは全国約4万店舗、お寺は全国で約8万寺とされています。この数のお寺が、それぞれきちんと情報を発信するようになれば、変わるんじゃないか。また、情報を発信しているお寺とお寺をつなげることによって、より一層、発信力が強くなるんじゃないかと思ひまして、興味のあるところにはどんどん足を運んで、実際に人に会って聞いて回りました。

た。どんなことをやっているんですか、どうやったらいいんですか。そうやって情報発信のノウハウを教わって、お知らせや時報を始めたり、講演やイベントを始めたりするようになりました。

だれにでも開かれたお寺を めざす

お寺というのは、檀家さんだけのものではなくて、すべての人に開かれています。もちろん、「檀那」という言葉があるくらいで、檀家さんはお寺の強力なサポーターなのですが、だからと言って、檀家さん以外が来てはいけないというのはおかしい。お寺は無税だということを考えれば、一種の公共施設だともいいくらいです。市役所とか公民館とかそういうところと同じように、あらゆる人が来ていい場所。うちは曹洞宗で、



□□□□□□□□□□□□□□

道元禅師の教えを元にはいますが、ありとあらゆる人が来ていい場所なんです。

多くの人に、もっとお寺、お坊さんを使ってもらいたいと思います。お葬式や法事をやる前に、お坊さんと知り合うほうがいいに決まっていますよ。昔は、お坊さんというのは、地域で一番の物知りだったはずですよ。田舎で農家の仕事をしていれば、その土地のことしか知る機会がありませんが、お坊さんはいろんな土地を歩いて、

いろいろな人に来て、いろいろな情報を仕入れて、また、元の土地に帰ってくるからです。ところが、いま、一番ものを知らないのは、もしかしたらお坊さんかもしれない。葬式と法事の時だけ外に出て、門を閉めて閉じこもっている。最近では、お坊さんの法話がつまらないとか、お布施が高いとか、葬儀にかかる時間が短いとか、いろいろな理由で、葬儀の際のお坊さんの法話を断るといふことがあるそうです。そうすると、お坊さんの役割というのは、「葬式坊主」どころか、「お経坊主」です。お経を読むだけ。それならお経のCDを流しておけばいい、という話になりますよね。それで30万円、40万円のお布施を払うなんて、消費者からしたらありえない。

私たちがお葬式や法事に行く意味は、そこにいる人たちの心に手を差し伸べることでしょ。火事と葬式は村八分に入らないと言われていたのに、いまの時代、それすら関わりがなくなりました。どこそこのおばあちゃんが亡くなったということを知らないまま、半年くらいして、最近見かけないねという話が出て初めて気づくなんていうことが、ほんとうにあるんです。これでは、お寺の存在意義、お坊さんの存在意義がない。その意味で、お坊さんは自分たちの一生懸命さをしっかり見せていくことが大事になります。そして、その一生懸命さというのは、外に向かって発信することです。門を閉じてお寺にこもっているだけでは、もう続かない。外に向かって開かれたお寺にする、情報を発信することが必要なのです。そのための窓口として、うちの場合は、イベントをやったり、ラジオ番組をやったりしていますが、それは、お葬

式や法事の時だけでなく、ふだんからお寺との距離を縮めてもらいたいという気持ちがあるから続けているのです。お寺のほうから積極的に近づいていくこと。お寺の周りにいるすべての人がお客さまだと考えるようになることが大事だと思います。

ネットワークの中心にお寺を置く

地域の人たちはお寺のやっていること、お坊さんのやっていることをよく見えています。その「見られている」という意識が、お坊さんにはこれからますます必要になっていきます。自分を客観的に見るができる人でないと、地域を見渡すということはできませんね。これからは、お寺が地域の中心にならないといけ



□□□□□□□□□□

ない時代なんです。地域の中心にいてこそ、みんなから必要とされる存在になれるのです。お寺に行けばいいことが聞けるかもしれない、あそこのお坊さんに相談すればなんとかなるかもしれない、というような、信頼される存在になる。地域の情報ネットワークの中心にお寺がいることが大事です。それに、お寺というのは、地域の情報を集めるにはぴったりの場なんですね。お葬式や法事は毎週のようにありますから、毎回30人とか50人くらいの人たちと話ができ、人脈が広がっていきます。たとえば、お医者さまを紹介してほ

しいと言われたときに、自分が知らなくても、そのお医者さまを知っている人を知っているということがあります。そうやって、お寺の立場を活用して、どんどんネットワークを広げていく。それがお寺の役割であって、みんなに必要とされる存在



□□□□□□□□□□

になる一番の方法だと思います。ほかにも、最近、お寺が成年後見人を引き受けるという話が出てきていますが、これは、お寺が信頼されていること、必要とされていることのいい例だと思います。

地域の人たちに信頼され、頼られ、必要とされる存在。地域の中心にお寺がいるというのが理想です。困ったこと、悩んでいることがあったときに、あのお寺に行けばなんとかなると思ってもらいたいですね。そのためにも、生老病死のあらゆる場面にお寺が積極的に関わって、多くの人との縁をつけておく。うちは保育園もやっていますので、まさに、「ゆりかごから墓場まで」の世界です。子どもたちがこれから成長していく過程で、人生が上手くいっているときは、自由に外に出かけていけばいい。けれど、困難にあったときに、いつでも帰ってこられるような、人生の中の「ホーム」でありたいと思っています。まず、お寺から情報を発信する。お寺の役割はそこから広がって、立ち上がってくるのではないのでしょうか。

(聞き手・構成＝編集部)